令和３年度　埼玉県特別活動研究会　**研究主題**

よさや可能性を発揮し合い、確かな資質・能力を育む特別活動

１　主題設定の理由

世界は今、予測困難な時代を迎えている。日本の学校教育に目を向けると、昨年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴う学校の臨時休業や分散登校、学校の新しい生活様式などこれまでの学校生活が一変した。子供たちは、先が見通せない不安や様々な制約の中、「いき苦しさ」を感じている。また、「日本の子供たちは、自己肯定感や自己有用感が低い」と指摘されて久しい状況も続いている。この課題の解決のために学校教育においても様々な取組がなされ、成果をあげているものの、変化の激しい社会を迎えている今、さらなる工夫が求められている。さらに、様々な教育的支援が必要な児童生徒が増加しているなど子供たちの教育的ニーズが多様化している現状がある。

これまでの日本の学校教育は、子供たちの短所の克服に力が注がれてきた側面がある。確かに「できない」ことを「できるようにする」ことは我々教師の使命である。しかしながら、子供たちが多様化する中で、「できない」ことだけに目を向けるのではなく、「できる」ことを伸ばすことが子供たちの資質・能力の育成につながるのではないだろうか。「長所はこれを発揮するに努力すれば、短所は自然に消滅する。」（『渋沢栄一訓言集』）これは、埼玉県深谷市生まれで、「日本の資本主義の父」と言われた渋沢栄一氏の言葉である。現代の言葉に直すと、「自分の長所を見つけて、それを伸ばすように努めれば、短所はいつの間にか、消えてしまう」という意味である。つまり、短所を直すより、長所を伸ばそうという教えである。

中央教育審議会は、令和３年１月に「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す,個別最適な学びと,協働的な学びの実現～（答申）」を取りまとめ、令和の日本型学校教育として、個別最適な学びと協働的な学びが重要であるとした。指導の個別化、学習の個性化といった個に応じた指導を一層重視するとともに、「一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出す」ために、多様な他者と協働することが重要であると示された。さらに、同答申では、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力として、「自己肯定感・自己有用感」「他者への思いやり」「対面でのコミュニケーションを通じて人間関係を築く力」「困難を乗り越え、ものごとを成し遂げる力」が示された。これらの資質・能力の育成には、特別活動が寄与するところが大きいと考える。

本会では、「私」「私たちの学級」「私たちの学校」を主語に、物事を語ることができる子供の育成を目指し、育てたい資質・能力を明確にして研究を進めてきた。昨年度は、「よさや可能性を発揮し合う」ことに焦点を当て、確かな資質・能力を育成する特別活動の在り方について、研究を深める１年とした。その成果として、①様々な活動が制限される状況においても、「よさや可能性を発揮し合う」という視点を大切にし、活動を工夫することで、確かな資質・能力が育成されること、②よさや可能性を発揮している具体的な姿を明確にすることで、資質・能力の育成につながること、③よさや可能性を発揮し合うことが自己有用感の高まりにつながること、の３点が明らかになった。その一方、課題として、①子供が自分のよさや可能性に気付き、発揮し合うための手立てを明確にすること、②教師が子供一人一人のよさや可能性を見つける視点を明確にし、指導と評価の方法について工夫・改善することの２点が確認された。

これらを踏まえ、子供に確かな資質・能力を育むためには、一人一人のよさや可能性を、様々な集団活動の中で発揮し合えるようにしていくことが重要であると考えた。そこで、研究主題を「よさや可能性を発揮し合い、確かな資質・能力を育む特別活動」と設定した。

２　研究の目標

研究主題に迫るため、次の２点を目標に研究を進めることとした。

○　一人一人のよさや可能性を発揮し合うための手立てについて明らかにする。
○　確かな資質・能力を育むための指導と評価の方法について明らかにする。

なお、本会として育成を目指す「確かな資質・能力」については「生活や社会における諸問題を見いだし、多様な他者と協働しながら解決し、自分の人生や社会を拓いていくことのできる力」として捉えていく。この資質・能力は、子供たちにとっての社会である学級・学校を含め、将来歩んでいく社会で生きて働く実践力でなければならない。そして、「よさや可能性を発揮し合う」ためには、適切な教師の指導の下、特別活動で最も重要な特質である自主的、実践的な活動を展開することを中心に、計画的、継続的に実践していくことが不可欠である。その営みは、やがて子供たちに、経験したことのない状況をも乗り越えていける力を育んでいく。それはまさに、今、求められている資質・能力であると考える。

３　研究の内容

研究を進めるにあたり、次に示す２つの内容を中心に、専門委員会ごとに研究の視点を設け、それぞれの実践において、身に付けさせたい資質・能力を明確にし、その育成のための手立てや方法について研究を深めていく。

⑴　よさや可能性を発揮し合い、確かな資質・能力を育むための指導計画

子供たちの今の実態と将来の姿を見据え、年間や学期、あるいは、各実践の中で、発達の段階に応じた活動を展開していくための指針となる指導計画について研究していく。以下は、そのポイントである。

①　「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点を踏まえた指導計画を作成する。
②　一人一人が集団の中で役割を果たしたり、活躍したりできるような指導計画を作成する。
③　学年間・学校間での接続の在り方を考え、学びの蓄積が継続されるような指導計画を作成する。

⑵　よさや可能性を発揮し合い、確かな資質・能力を育むための指導と評価の方法

指導については、集団活動のよさを生かしながらも、事前・本時・事後それぞれの活動における実践上の留意点にも目を向けていく。また、評価については、一人一人の変容を見取るために、自己評価に留まらず、よりよい相互評価の方法にも重点をおいて研究していく。以下は、そのポイントである。

①　「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点を踏まえた指導と評価の在り方を考える。
②　一人一人が集団の中で役割を果たしたり、活躍したりできるような具体的な手立てを工夫する。
③　一人一人の変容を見取り、次の実践への意欲を高める個人内評価や多様な評価方法を工夫する。

学校は、全ての子供たちが安心して楽しく通える魅力ある場所でなくてはならない。昨年度は様々な制限を余儀なくされたが、子供たちが主体となる自主的、実践的な学びを特質とする特別活動の重要性が再認識された一年でもあった。もはや、「例年通り」は通用しない。また、「できないからやらない」という安易な考えでは、子供たちの資質・能力は育たない。子供たちの学びを止めてはならないのである。

私たち教師や子供たち一人一人、そして社会全体が答えのない問いにどのように立ち向かうのかが問われている。今こそ、特別活動の特質である「互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを生かし、「子供たちに確かな資質・能力を育成するために、何を、どのように行っていくのか」について、私たち教師が真剣に向き合い、各学級、各学校で試行錯誤し工夫して取り組むときである。そのためには、目の前の事象から解決すべき課題を見いだし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことが重要である。そして、子供たち一人一人の特性や教育的ニーズ、キャリア形成など子供の発達を把握し、様々な課題を乗り越え、一人一人のよさや可能性を伸ばし、発揮し合えるようにしていくことが大切である。今できることを子供たちとともに実践し、歩みを進めていく。すべては子供たちの今と未来のために。